

やんばるの少年兵「護郷隊」～陸軍中野学校と沖縄戦～

名護市史「戦争編」部会 事務局 川満 彰

はじめに

1944年10月25日、沖縄県北部(以下やんばる)において16才から18才の少年たちが召集された。沖縄県立師範学校・中学校および高等女学校の生徒たちより半年も早い召集である。その名を秘匿名「護郷隊」(以下「」省く)という。集合場所は名護国民学校、召集された地域は、北は北部3村から南は金武町、恩名村(南恩名区以北)とやんばる全域に広がる。

召集された少年たちは昼夜問わずの厳しい教育・訓練を強いられた。その指導者となった分隊長らは少年たちと同郷の在郷軍人や翼賛壮年団員らである。彼らはその少年たちを戦地でむやみに死なせたくなかったのか、彼らの非人道的とも言える殴る蹴るの教育・訓練は、元護郷隊員らにとって戦後しばらくまで禍根を残す。

護郷隊は、1944年10月下旬から翌年(1945年)3月まで数次に分けて召集された。その理由は、第32軍の配置変更命令で護郷隊配置地域が何度か変更され、その度にその土地の少年たちを召集したことによる。その数、およそ1000人にのぼる。一方、大本営は召集を容易にするため、これまで成人男子満19才以上の召集年齢を満17才以上に引き下げた(同年11月1日付)。やんばるでは、これを機に当時青年学校へ通っていた17才に満たない少年たちも「志願兵」というかたちで護郷隊へ入隊したのである。

本論で登場してくる元護郷隊員は15、16才で召集された少年たちも多い。彼らの多くは2次・3次で召集されており、召集方法については後述するが、彼ら自身「召集」なのか「志願」なのかわからないと述べる。

1945年4月1日、読谷村から北谷村にかけての海岸線から米軍上陸は始まった。護郷隊員らは配置されたやんばるの山々で戦闘を開始。しかし、彼らの戦闘は橋の爆破や米軍キャンプ地等を夜な夜な強襲するというその場しのぎの遊撃戦でしかなく、米軍の圧倒的な兵員・物量に成すすべもなく解散へ追い込まれていった。護郷隊の戦死者は160人におよぶ。

なぜ、やんばるの少年たちは召集されたのか、それは大本営直轄の陸軍中野学校が深く関与していた。

大本営は、サイパン島での敗戦(1944年7月)をきっかけに、さらなる米軍の北上に備え、パプア・ニューギニア、フィリピンへ中野学校出身者を軸とした第1遊撃隊、第2遊撃隊を配置した。そしてさらに北上してくることを予測し、沖縄島へ第3遊撃隊、第4遊撃隊を配置したのである。彼らはその名を秘匿とし、且つ「故郷は自らの手で護る」という戦意高揚を図るため、第3遊撃隊を「第1護郷隊」、第4遊撃隊を「第2護郷隊」と命名したのである。

少年たちが召集される前月(1944年9月13日)、村上治夫、岩波寿、広瀬日出生と十数人の下士官らが小禄飛行場に降り立った。彼らは陸軍中野学校の卒業と同時に沖

繩赴任を命じられたのである。

陸軍中野学校とは、諜報・防諜・謀略・宣伝など、特殊任務要員を養成する大本営陸軍部直轄の秘密戦要員養成機関のことである。彼らはそこで学んだ特殊任務を実戦するため、沖縄にやってきたのである。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

3. 召集されたやんばるの少年たち

(1) 第1次召集 名護国民学校 ー北部各地からの召集ー

名護国民学校の運動場に、国頭郡全域(本部半島地域除く)から、召集令状を受け取った16才から18才の少年たちが集まってきた。鉄血勤皇隊より半年も早い召集である。その当時の様子を玉里勝三(羽地村呉我：16才)は「昭和19年の十・十空襲がすんだ10月15日に召集令状が来て10月25日に入隊した。あの時に青年学校の制服を着て、巻きケハンと地下足袋を持って入隊したわけさ。フンドシひとつ、軍服1着ずつ、毛布2枚ずつあたって入隊をした。僕たちは青年兵と呼ばれた」と語る。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

召集された少年たちは「青年兵」と呼ばれた。そして、憧れの軍服を与えられ、帯剣や銃(九九式・三八式)もそれぞれに与えられた。少年たちは訓練期を終え、一時自宅待機中に軍服や帯剣を着け、集落内を闊歩することで自慢していたという。小さい頃から憧れだった軍服を着け、「青年兵」と呼ばれることは、当然のように地域で一人前の大人として認められた格好となっていく。護郷隊の「故郷は自らの手で護る」という意識は、彼らの純粋な心を糧にして成長していったのである。

村上は、当時の少年らの様子を「入隊風景を描写すると、可愛い童顔の少年が一人前の兵士そのものの顔で入隊。早速衣替えとなると軍服が大きすぎて困るやら、靴が大きすぎるやら大騒動。それでも先輩が分隊長、小隊長とあって気分もぐっと和やかで、一両日のうちに規則正しい軍隊生活に移行していったのはさすがであった」と述べている。しかし、村上のいう「気分もぐっと和やかで」の回想は少年兵らにとって苦しく辛い思い出となっている。

・略・「分隊長は同郷の東村から2人いた。ひとはそうでもなかったが、もうひとりには容赦なく殴られた。手は使わん、革で。その人たちはみんな在郷軍人だった。大変だったよ」と語る。同じく喜納宗和も「いや、おどろいた。この人が昨日まで道で会おうと『ハイサイ(こんにちは)』とにこにこ笑ってあいさつを交わしたかと思う」と、同郷である分隊長の豹変ぶりを述べる。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

1945年2月14日頃、村上は第3次教育隊として北部全域から再々召集を行う。召集地は羽地国民学校である。新里幸貞(羽地村真喜屋：15才)は「青年学校に村上治夫が来て、中学校の校長先生と2人で徴兵検査があった」と語る。親川和夫(羽千村稲嶺：15才)も徴兵検査を受けており、親川は「村上治夫が青年学校に来ました。(私たちは)集められて『護郷隊がいやな者出て来い』と言われ、誰も出るわけがない。『よし、立派』ということで、身体検査がはじまった」と述べる。・・・第3次召集は全員ではないが、威圧的に「志願」という形で召集されたのである。 以下略